

キャンパス通信 ippeki



- 01 学長挨拶／  
本学の更なる発展を願って
- 02 特集／  
第47回フローレンス・ナイチンゲール  
記章受賞記念講演
- 03 大学院／  
大学院研究中間報告会を開催
- 04 講義・教員紹介
- 05 学部／「4年生国家試験を控えて」将来の道を考える
- 07 暹碧祭
- 08 学内活動
- 09 学外活動
- 10 図書館ビブリオバトル

第18号  
2019.10 ▶ 2020.3

第47回フローレンス・ナイチンゲール記章受賞式にて



ひとりを看る目、その目を世界へ

 日本赤十字九州国際看護大学  
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School



## 本学の更なる発展を願って

一碧をお読みいただいている皆様には、日頃より本学の教育・運営に大きなご支援を賜り、深くお礼申し上げます。最初から私事で恐縮ですが、私は今年3月末で4年間の任期が終了し、退職いたします。私にとって初めての私立大学勤務、福岡での単身生活は、目新しいことや戸惑うことも数多くありましたが、私学の運営に精通した教職員たち、明るく屈託ない学生たちに支えられて、間もなく役割を終えようとしております。学部生、大学院生への講義の機会は多くはありませんでしたが、学生たちとの触れ合いは、いくつものシーンがそれぞれ鮮明にかつ楽しい思い出となっております。

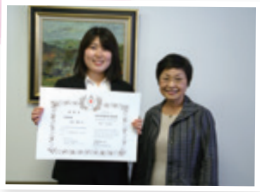
4年間で強く印象に残るもの、それは着任早々に文部科学省補助事業「大学教育再生加速プログラム(AP)テーマV 卒業時における質保証の取組の強化」に採択されたことです。事業期間は4年で、ちょうど私の任期と一致しておりました。平成28年当時、看護系大学は全国に256校ありましたが、その中で本学は唯一の採択校でしたから、事業を成功させねばならないと強く決意したことが思い出されます。

本学の取り組み内容は、学部教育と就職後の継続教育とをシームレスに繋いで専門職を育てる看護職キャリアパス基礎スケールの開発、学生の学修成果を可視化するシステム構築と学位証明書補足資料(ディプロマ・サブリメント)の作成、学生の主体的な学修を強化するためのアクティブ・ラーニングの推進、卒業生の追跡調査等によるカリキュラム評価への活用などが柱であり、全学で一体となって教育改革を進めることができました。また、AP事業を進める中で、本学と九州各地および山口の赤十字病院看護部の皆様との協力連携体制が強化され、臨床での卒業生たちの状況を知る機会も増えたように感じております。今後は、これらの取り組みがさらに充実、洗練されて、本学の教育活動にしっかりと根を下ろし、常に先進的でモデルとなる大学であり続けてほしいと願っています。

赤十字の看護学教育は、第2次大戦後の看護学教育のモデルとして、聖路加と合同で行われた「東京模範看護学院」の一翼であったという歴史と伝統を受け継いでいます。また、本学は、九州の中では国立大学を除けばたった2校しかない学士課程・修士課程・博士課程を有する完成した大学です。その上、今日の国際紛争やテロ、大量の難民問題、地球温暖化により頻発する巨大災害、新型コロナウイルスによる感染症など、現代社会が直面する新しい生命の危機状況を考えますと、赤十字の「人道」の理念を基調とした看護学教育は、これまで以上に重要性が増しています。

このように見ますと、本学はいろいろな点で優位性を持った看護大学ですが、そこに安住はできません。わが国では18歳人口はますます減少し、全人口も縮小していきます。そのような社会は看護に何を期待するのでしょうか。これを的確に予測し、本学における看護学教育を多様で柔軟に作り変えていくことが求められていると考えます。本学では、令和4年に修士課程、令和5年には学士課程のカリキュラム改正をすることを決定しておりますが、そのカリキュラムが社会から高い評価を得るためには、大学の教職員だけでなく、学生たちも含めた大学総体としての絶え間ない努力が必要です。日本赤十字九州国際看護大学が今後も、人々の健康と尊厳を守るために有用な看護専門職者を数多く輩出できるよう、見守り、お力添えをいただきますよう心からのお願いを申し上げます。

学長 田村 やよひ



特集

第47回

# フローレンス・ナイチンゲール記章 受賞記念講演



テーマ／「<sup>みち</sup>私の歩んだ道程」

講演者／ 日本赤十字九州国際看護大学 前学長 竹下 喜久子氏  
一般財団法人 日本赤十字社看護師同方会 理事長

2年に1度、顕著な功績のあった看護師等に贈られる世界最高の記章である「フローレンス・ナイチンゲール記章」の受賞者が、ナイチンゲール女史の生誕の日である5月12日、赤十字国際委員会(ICRC)ナイチンゲール記章選考委員会(スイス・ジュネーブ)から発表されました。

第47回となる今回の記章では、世界19カ国29名が受賞し、本学の前学長 竹下 喜久子氏(69)が受賞されました。竹下氏は、平成25年度から平成27年度までの3年間、本学の看護教育に尽力され、今回の記章では、国内外の災害救護活動への画期的な取り組み及び医療施設の看護師への実践教育などの功績が認められての受賞となりました。

本学では、竹下氏の受賞を記念して、2019年10月12日(土)に受賞記念講演を開催いたしました。竹下氏の国内外における活動はもちろんのこと、臨床、教育におけるこれまでの道程をさまざまな経験とともにご講演いただきました。

## フローレンス・ナイチンゲール記章とは・・・

この記章は、紛争下において敵味方の区別なく負傷者を保護する役割を担う赤十字が、1907年および1912年の赤十字国際会議において、顕著な功績のある世界各国の看護師を顕彰し、授与することを決定したものです。

受賞資格を有する者は、看護師や篤志看護補助者であって、平時または戦時において傷病者、障がい者または紛争や災害の犠牲者に対して偉大な勇気を持って献身的な活動をした者、公衆衛生や看護教育の分野で顕著な実績を残した者、創造的・先駆的貢献を果たした者です。

同記章は、鍍銀(とぎん)製アーモンド型メダルで、表面は燭(ともしび)を手にしたナイチンゲール女史の像と「1820～1910年フローレンス・ナイチンゲール女史記念」の文字があり、裏面には受賞者名と、ラテン語で「博愛の功徳を顕揚し、これを永遠に世界に伝える」と刻まれています。



## 学生からのコメント

私は、今回の受賞記念講演にて竹下喜久子先生とのフリートーキングに参加しました。竹下先生は、国際活動だけでなく、臨床現場での管理職の経験、看護の教育現場での経験と様々な経験をされており、私の中での「看護師」としての仕事の概念を大きく超えているように感じました。

また、現在、看護学として勉強していることが、今後看護師としてだけでなく、管理職、国際協力、教育と幅広い現場に活用できると感じ、自分の将来に対する期待が膨らみました。

ご講演を受けて、私は先生に「日本の看護においても数々の問題がある中で、どうして国内の問題解決と並行して国際問題にまで着手しようとしたのですか。」と質問をしたところ、先生から「きっかけがあったから」とのお話をいただきました。私はこの答えの本意をきっかけがあったときに確実な準備ができていたからだと考えました。私も今後の人生において、大きなチャンスとなる“きっかけ”を活かしていくように、今できる“準備”をしていきたいと思いました。

2年生 浦西 美空 さん



## 竹下(浦田)喜久子氏のプロフィール

1950(昭和25)年	熊本県生まれ	1998(平成10)年	神戸市看護大学助教授
1972(昭和47)年	福岡赤十字高等看護学院卒	2003(平成15)年	日本赤十字社事務局看護部長
1972(昭和47)年	熊本赤十字病院勤務	2013(平成25)年	日本赤十字九州国際看護大学学長
1992(平成4)年	熊本赤十字病院看護部長	2013(平成25)年	一般財団法人日本赤十字社看護師同方会理事長



# 大学院研究 中間報告会を開催

2019年11月8日(金)に令和元年度大学院研究中間報告会が開催されました。

今回行われた報告会では、修士課程の院生が、発表時間と質疑応答を合わせた25分間の持ち時間で、研究の進捗状況を発表しました。発表後の質疑応答では、講義では意見を交わす機会のない様々な領域の教員から質問や意見、さらには研究の質を向上させるための助言も多く飛び交っていました。院生にとっては、研究の方向性や研究成果を人に伝えるためにどのようにプレゼンしたらよいか考える良い機会になったようです。

本学修士課程では看護職者として勤務しながら、学ぶ院生もいます。それぞれ現場での経験から疑問に思ったことを問いとし、その問いを明らかにするため、日々研究を重ねています。

ある院生は、健康寿命(健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間)が、男女ともに延伸する中、運動プログラムの実施により、高齢者の歩行能力、バランス能力、日常生活活動が変化するのか、その有効性が明らかになれば、健康寿命の延伸に寄与できると考え、研究に取り組んでいます。

また、ある院生は、重大な災害や事故には至らないものの、直結してもおかしくない「ヒヤリハット」事例を複数回経験した新人看護師に、看護師長がどのように関わっているのかをインタビューによって明らかにし、ヒヤリハットの防止や、さらには離職防止につながる可能性も視野に入れ研究を進めています。

さらに別の院生は、医療従事者の報酬が低い開発途上国における副業の常態化に焦点をあて、看護師長が副業を持つスタッフをどのようにマネジメントしているかを明らかにし、看護サービスの質を向上するための援助のアプローチを考える一助とするための研究に取り組んでいます。

このようにさまざまなテーマを持つ院生が意見交換できる合同ゼミや、他領域の教員からアドバイスをを得る機会となる研究計画発表会、中間報告会などを複数設定しています。

今回の中間報告会で報告された大学院生のおひとりに、看護職者(社会人)として、大学院で学ぶ意義について伺ってみました。

「日々の煩雑な業務で、とかく狭い考えに陥りやすい時があります。しかし、大学院で学ぶことで、新しい知識、しかも、深い知識に触れ、視野を広げることができた実感しています。この学びを職場に還元するべく活動を始めたところです。」  
とお答えいただきました。

このように専門職である看護師にとって、学び続けることは大事なことです。本学では、学びたいという気持ちを持った社会人に大学院の門戸を開いています。



# 質的研究方法の基礎を 学ぶということ

## コンピューターではできない、抽象化、概念化するスキルを身につける

大学院科目「質的研究方法の基礎」(担当:教授 倉岡有美子)では、修士課程1年生を対象に、「質的研究手法を用いるための基礎知識として、質的データの収集方法および分析方法、さらに分析結果の解釈等について、文献や模擬データによる演習によって学ぶ」ことを目指しています。具体的には、①履修者全員で話し合い、共通のインタビューテーマとインタビューガイドを決める、②2人1組になり、お互いにインタビューする、③分析するデータ(3名分)を決めて、履修者全員で分担し、逐語録を作成しコード化する(テーマに関連する部分を抜き取り、要約する)、④2グループに分かれて、コーディングしたデータをもとにサブカテゴリー化、カテゴリー化する(同じ内容のものを集めて、さらに抽象化した名前をつける)、⑤グループごとにカテゴリー化の成果を発表し意見交換する、です。

今年度は、「私の理想とする家庭像」をテーマに取り組みました。院生は、講義の中で自分の傾向に気付くこともありま。例えば、インタビューで相手の本音を引き出せたと感じて、逐語録を起こすと、自分の研究者としての偏見や思い込みがあり、それにひっぱられていることが如実に表れます。自分の価値観や信念は「かっこに入れて」と習いますが、実際にやってみて自分の考えや傾向に気づき、皆さん苦笑しています。

院生の中には、本科目を受講することで初めて質的研究方法を体験する方もいます。そのため、入門編というかたちで教えるように気を付けています。私は、研究方法は実際にデータに向き合い、分析することで身につくと考え、院生の経験を通しての学びを支援しています。



## 担当教員にインタビュー

**Q** 小さい頃の夢を教えてください。

**A** 小学生の頃はスイミングスクールの先生で、中学生になってからはずっと、医師を目指していました。中学校の同級生が青年海外協力隊員になりたいと言っていて、その影響です。当時は心理学に興味があり、JICAに心理学の分野で貢献できるかと手紙を書きました。JICAからは「医療系の方が喜ばれる」と丁寧なお返事がパンフレットとともに届いたので、それから無医村や過疎地の医師として働きたいと思うようになりました。その後、志望する医大への入学が厳しいと分かり、高3の時に新聞で、当時の日本看護協会会長の南裕子先生が「リエゾン看護師」の紹介をされているのを読んだことをきっかけに、看護学の道を考えるようになりました。その頃から、大学院への進学も視野に入れていました。

**Q** 教員の道に進まれたきっかけは?

**A** 大学院修了後に病院で看護師長として働いていましたが、恩師から大学に戻ってこないかとお話をもらいました。当時、2年間手掛けていたプロジェクトの結果が見え、師長としてのやりがいを感じていましたし、これまでできてくれたスタッフと別れることにも悩みました。しかし、教員という仕事で社

会貢献することも大事だと考えました。人を育てるということは、師長も教員も共通していますし、科目を教えるうえで、師長としての経験があったおかげで、理論と経験を結び付けて学生に話すことができるので良かったです。

**Q** 看護管理者とは、どんな仕事をする人ですか?

**A** 看護実践と看護管理実践は、内容が違います。企業でいうと、師長は課長で、看護部長は部長ですね。私が師長の頃は、患者の状況を把握するのに部屋を訪ねて話をしたり、環境が整っているかなどの確認をしたりしましたが、看護師としての実務よりも、部署の目標を定め、それに基づいてスタッフが動いているか、必要な力を習得できているかなどを見ていました。

**Q** 学生にどのような看護職者になってほしいですか?

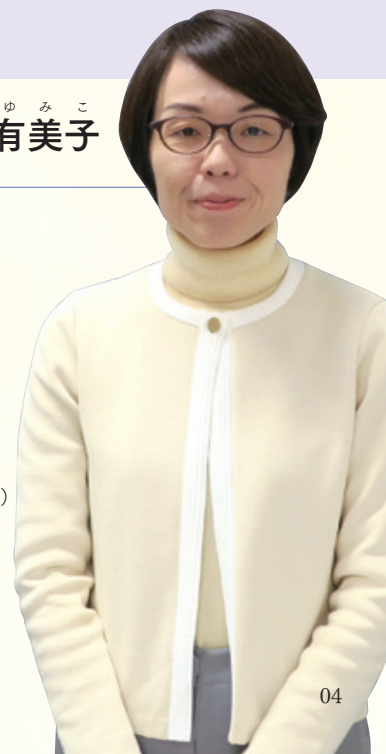
**A** 看護職という狭い世界にとどまらず、看護という強みをいかした面白い仕事を広く柔軟にやり、最終的には、世界を変革していくような人になってほしいと思っています。

また、本学にもバックボーンの違う方にもどんどん来てほしい。看護以外の学問を持っている強みを、ぜひ看護で生かしてほしいと思います。

くらおか ゆみこ  
看護の基盤領域 教授 倉岡 有美子

### 略歴

- 1999年 日本赤十字看護大学卒業  
日本赤十字社医療センターに勤務
- 2008年 聖路加看護大学大学院看護学研究科博士前期課程修了  
さいたま市立病院に看護師長として就任
- 2010年 聖路加看護大学(2014年より聖路加国際大学に改称)大学院  
看護学研究科看護の機能領域(看護管理学)助教  
聖路加国際大学認定看護管理者ファーストレベルプログラムなど看護管理者対象の  
研修会の講師を務める
- 2017年 同 看護学博士号取得
- 2018年 日本赤十字九州国際看護大学看護の基盤領域(看護管理学)教授  
著書 『看護師長として成長し続ける! 経験学習ガイドブック』(医学書院)  
『看護現場を変える0~8段階のプロセッサーの企業変革の看護への応用』(医学書院)  
(共著) 『実践家のリーダーシップ—現場を変える、看護が変わる—』(ライフサポート社)  
『患者中心の意思決定支援—納得して決めるためのケア—』(中央法規)  
『ナラティブでみる看護倫理—6つのケースで感じるちからを育む—』(南江堂)  
『臨床のジレンマ30事例を解決に導く看護管理と倫理の考えかた』(学研メディカル)  
『ナーシング・グラフィック看護の統合と実践①「看護管理」(第4版)』(メディカ出版)





## 4年生インタビュー

学部

国家試験を  
控えて—

# 将来の道を考える

—看護師になる（または看護大学に入る）と決めた  
きっかけを教えてください。

**小泉：**父親に看護師を勧められました。それまでは、看護師とは  
どういう職業かを全然知らなかったので、自分で調べて、  
なんとなく自分に合っているんじゃないかと思って。

**藤井：**高校のときにサッカー部のマネージャーをしていて、プ  
レーヤーと話している時間が好きで、それがきっかけで、  
人と関わる仕事がしたいと思ったことが、看護師に興味  
を持つきっかけに。

**小泉：**同じです。人と関わる仕事がいいなど。

—大学に入り、看護を学んでみて、気持ちに変化は  
ありましたか？

**小泉：**実習で、実際の看護師の姿が見  
えてきて、「（自分には）意外と  
向いてないぞ」と。はじめは実習  
にもついていけなくて、看護師に  
なれるのかなという気持ちに  
なってきました。憧れから現実が  
見えて、自分にはできるのかな  
と。けれど、「統合実習」（4年生  
の必修科目。臨地実習の最終実習）を自分なりに計画して  
進めていくと、やっと、楽しさが見えてきたなど。



小泉 敬人さん

**藤井：**身近に看護師がいるわけではないので、自分の中のイ  
メージでしかなかったけれど、勉強や課題をこなすなか  
で、思った以上に大変だったし、「私って（看護師に）向い

てないんじゃないかな」と思うこ  
とが多くて。でも、周りに聞いた  
ら、けっこう自分も不安に感じて  
いるという人がいたので、なんと  
かなるかなと。実習を通して、受  
け持ちの患者さんと話している  
時間が楽しかったし、実習を経験  
して、いまはこの道を選んでよ  
かったなと思っています。



藤井 美希さん

—就職先（病院等）は？

そこに決めた理由を教えてください。

**小泉：**名古屋第二赤十字病院です。実家が愛知で、近くてずつ  
と知っている病院なので、親しみもあったからです。急性  
期にいきたかったんですね。地元だし、救急だし。南海  
トラフ地震が、十何年以内には起こるということを、自分  
が小学校のときから言われているんですけど、それからもう  
十何年経つので、実際、名古屋（第二赤十字病院）も地  
震に対して結構力を入れているので、そういうところにも  
関わっていきたいなと思って選びました。

**藤井：**私は、嘉麻赤十字病院です。もともと人と関わる仕事がし  
たいなと思っていたので、できるだけ患者さんとゆっくりコ  
ミュニケーションがとれる看護師になりたいなという思い  
があって。「日常生活援助実習」（1年生必修科目。看護の  
専門性を探究する最初の実習科目）ではじめて行った実  
習先が嘉麻赤十字病院で、そこでの患者さんと看護師さ

んとの関係性がすごくいいなと感じたことがきっかけで選びました。

—国試を控えて、今の率直な気持ちは？

**小泉：**不安ですね。この（インタビュー）話をもらったときは、まだ、楽観的に考えていたけど、本格的な不安、焦りがでてきました。（国家試験の問題）一問、一問、たかが一問なんですけど、間違えるとそれだけで一喜一憂。

**藤井：**私も国試に対しては、ただ、ただ、不安です。卒業したら学生じゃなくて、社会人になるのはじめてだから、漠然とした不安があります。

—日常生活で落ち着かないときとか、不安とかありますか。

**小泉：**そうですね。夢に出ます。寝てるのに、疲れて起きる。（藤井さんに対して）ない？

**藤井：**私はない。睡眠が深い方なので。不安はありますけど、そんなに考えても変わらないかなと思うタイプなので、不安と半々くらいの気持ちで、自分ががんばれる程度にコントロールしたいなと思います。

—将来、どのような看護師になりたいと思っていますか？

**藤井：**現時点では、人と関わりたいという思いがあるので、それが理想の看護師像ではあるんですけど、これから実際に働いてみたら変わると思います。自分がどんな看護師になりたいのかというのを探しながら働けたらいいなと思います。

**小泉：**理想は、何でもできて、「小泉君いたら助かるわ〜」と誰からも頼られる看護師になりたいんですけど、そのへんはなるようになるかなと。あんまり考えても仕方がないので、あまり考えずになるようになっていくのがいいのかなと思います。

—本学のスローガン「ひとりを看る目、その目を世界へ」の意味について、どのように考えますか？

**小泉：**なんとなく国際的なことなのかなと思うんですけど、自分があまり国際に興味がないんですよ。自分なりに考える

と、学生だったら、一人でひとりの患者を看る。1対1で「ひとりを看る目」ですけど、看護師になると、学生の時ほど1対1では看ることができないと思うんですよ。7対1（看護師1名が入院患者7名を受け持つ体制）だと（患者が）7人になるし。病棟全体をおおまかに知っておかないといけない場合、1対集団になる気がします。そうなった場合、1対1で見ていたときより、一人ひとりに気を配る目の質が下がってしまう気がするんですけど、そのスローガンを聞くと、これまでのように1対1で見ていた質をそのまま世界へというか、集団へ、集団だけど、一人ひとり個性を持って見ていくべきなのかなというイメージがあります。

**藤井：**国際というと高校生のときは、自分が外に出て、海外に行って支援することだというふうに考えていました。この大学に入って「異文化間コミュニケーション」科目を履修して台湾に行ったんですけど、そのときに、海外に行くということだけではなく、日本にも外国の方がたくさんいらっしゃるし、一人ひとりが違う文化を持っているので、自分の価値観を押し付けたり、こうなんじゃないかっていう先入観を持って関わったりするんじゃないかって、それぞれの考え方、文化があることを尊重することが必要なんじゃないかなというふうに考えました。



インタビュー後、一緒に国試対策に励む仲間や応援する後輩とともに

## スクールカウンセラーの ひと言アドバイス



スクールカウンセラー  
上瀧 純一 先生  
(臨床心理士)

学生の悩み

国家試験が近づくにつれて、不安や焦りが出てきて、落ち着きません。

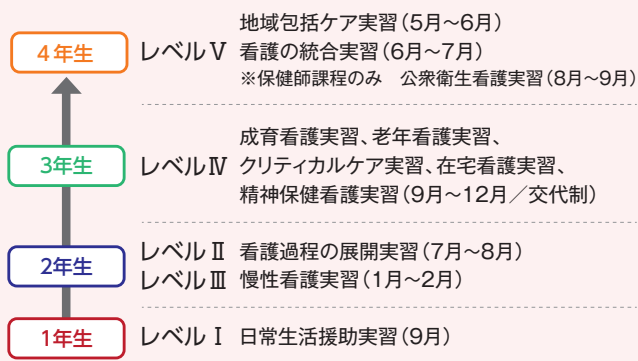
アドバイス

国試前の不安。そこに共通していることは、自信が持てないということなのかもしれませんね。では、どうすれば自信を持って国試に向き合えるのでしょうか？

自信とは、これまでの自分のやってきたことを認め、信じることです。だからこそ、自信をつけるためには、目標に向けて今の自分に出来ることを地道に積み重ねることが大切です。今の皆さんにとっては、周囲の人と協力しながら実習や試験・課題に自分のベストを尽くすことが、今後の自信につながるということです。また、これとは別に、試験当日の朝まで毎日継続してやれる行動を何か一つ決めてやってみてください。「起きたら直ぐに寝床を綺麗にする」などでOKです。何かを意識してやり続けたことのある人は、何も意識せず漠然と過ごしてきた人より、肯定的な自己イメージが持て、それが自信につながります。今から自分を信じるための材料を意識して準備してみてくださいね、応援しています！

次頁では、本学の学部生たちが、4年間でどのような実習や学内演習を経験しているのか、ご紹介いたします。

# 4年間の実習内容



## 看護技術Ⅲ(2年生)



## 学内演習の様子

### フィジカルアセスメント(1年生)

\*模擬患者として地域の方にご協力いただいています。



## 遥碧祭

2019年11月3日(日)に遥碧祭(学園祭)を開催いたしました。  
学生有志の実行委員が中心となって、企画と準備を進めてきました。  
当日は、本学が所在するむなかたりサーチパークのアスティ祭も同時開催され、  
学生や保護者の皆様だけでなく、地域の方々も多く訪れてくださいました。



## プログラム

- 10:00 オープニング
- 10:15 ミスコン・女装コン  
本学のトップが決まる!
- 10:50 早飲み大会  
牛乳とラムネの早飲み大会
- 11:30 軽音サークルMOL(Music Of Life)による演奏
- 13:00 成人の主張  
学生が熱い想いをぶちまけます
- 13:30 日赤のど自慢大会
- 14:35 ダンスサークルDnD(Dance Nurse Dance)によるパフォーマンス
- 15:00 ○×クイズ  
本大学祭と同時開催のアスティ祭  
(本学所在のむなかたりサーチパーク主催)による合同クイズ大会
- 16:15 ゆいまーるによる沖縄の伝統芸能エイサー披露
- 16:55 表彰式  
各部門のチャンピオンを発表
- 17:10 ビンゴ大会





# 第19回 国際シンポジウム 「性の多様性『LGBTQ+』に理解のある社会へ～医療現場での対応を考える～」

2019年9月30日(月)に学内にて第19回国際シンポジウムを開催しました。本年度は「性の多様性『LGBTQ+』に理解のある社会へ～医療現場での対応を考える～」と題して、セクシュアル・マイノリティである「LGBTQ+」の方への理解を深めることを目的としました。

当日は大学関係者を含め58名の方が出席され、クイズや学生発表、講演者の講話で知識を深めるとともに、ディスカッションで実際に起きた事例について考える参加型のシンポジウムを行いました。講演者として株式会社ランドホー代表・鈴木はなさんをお招きし、医療現場での当事者とその家族の困っている場面についてお話しいただきました。鈴木さんは、当事者の方やその家族の困っている事例を多く紹介くださり、「LGBTQ+」に関して「知る→考える→行動する」ということが重要であると教えてくださいました。ディスカッションでは、「LGBTQ+」の方が医療施設を訪れた際の事例を提示し、参加者の皆さんにも考えていただくためにグループワークによる意見交換を行いました。グループワークでは、学年や大学も異なる人とも意見を交換し、より考えが深まっている様子うかがえました。

本シンポジウムは、有志が集まった学生が実行委員として企画・運営を行う、学生主体のイベントです。今回は、実行委員が1年生のみでしたが、企画から運営まで協力し合い、お互いに知識を深めている姿が印象的でした。

## 実行委員長 1年生 福嶋 実穂さん

シンポジウムは何というところからのスタートの中、大変なことはたくさんありましたが、実行委員の中でお互いに興味があることを持ち出しながら、テーマや内容を決めていく作業は、学ぶことが多く、終わった今はやってよかったなと感じています。うまくいかないところはありましたが、1年生だけで運営したことで、次はこうしようなど来年度のシンポジウムに向けての反省点も見つかりました。

今回は「LGBTQ+」について取り上げたのですが、これから看護師になった時に患者さんとしていらっしやることは間違いのないと思います。その時に知らなかったではすまれないため、このシンポジウムを通して、知らないということは怖いことだなと感じました。

## 副実行委員長 1年生 中西 花誉さん

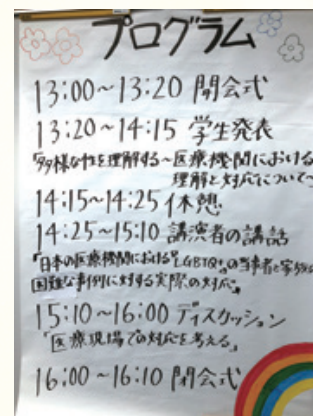
内容を決める中で多くのことを学び、知識が増えたことももちろんですが、みんなで企画、準備をして本番までもっていくことは難しかったですがやってよかったと思いました。人が集まらなかったり、シンポジウム内で戸惑ったりしたところもあったので、成功したかどうかは分かりませんが…。

看護師は、人とコミュニケーションをとる仕事であるため、知識が多いと役に立つことが多いと思います。看護以外の知識を学ぶことは、自分の成長につながると感じました。

また、今回のシンポジウムを通して、学生同士でお互いに興味があることについて、気楽に話し合えたり、情報共有したりできる場があればいいなと思いました。



学生発表の様子



シンポジウム後、鈴木はなさんを囲んでの意見交換会



実行委員のメンバー(中央は鈴木はなさん)

本学では、学生が企画・運営する国際シンポジウムを通して「LGBTQ+」といった性に限らず、多様性の社会の実現のために、学生ひとりひとりが多くのことを学べるよう取り組んでいます。

## 宗像市総合防災訓練に 学生ボランティアが参加しました

2019年9月14日(土)宗像市が実施する防災訓練に学生8名が運営補助のボランティアとして参加しました。この訓練は、宗像市で地震が発生したと想定し、市・関係機関・地域住民が一体となって実施する総合防災訓練です。

市の体育館で、避難所運営訓練、救急法講習(心肺蘇生法・AED)、非常用資材の組み立て訓練(テント、段ボールベッド)などの説明を事前に受け、本番となる市民の皆さんへの説明では、市職員の補助を行いました。

### 参加した学生の感想

私は、初めて市の避難訓練に参加しました。友人や先輩、地域の方々といったさまざまな年代の方と災害に対して同じ気持ちを持って訓練を体験出来たことは、良い経験となりました。それに滅多に見ることの出来ないドクターヘリを取り入れた訓練も見学しました。警察や消防士の方々の人助けをする姿を間近で見る機会は今までに無かったため、刺激を受けました。来年もぜひ参加したいです。

1年生 岩元 麗奈

今回の避難訓練には多くの市民の方が参加されており、体育館でテントの設営体験や仕切り板作成体験の時には、市民の方から積極的に質問が飛び交っており、毎年この避難訓練が行われているため、防災意識が高いと感じました。訓練には市役所をはじめ、諸機関の方々の協力があったからこそその臨場感のある訓練でした。

今後も自然災害による被害は避けられないと思います。しかし、訓練を重ねることで迅速に対応でき、被害を最小に留めることができると思います。今回のような市の避難訓練に学生ボランティアとして参加して、地域の方の防災意識を間近で感じることができ、私自身も防災についてより勉強し、知識を増やしていきたいと感じました。

4年生 植木 碧

## むなかた子どもまつりに参加しました

2019年11月3日(日)、「むなかた大学のまち協議会」の一員として、「むなかた子どもまつり」に参加しました。7回目の参加となる今回は、学生6名、教職員4名で参加し、例年好評いただいている「赤十字のキッズ救護服・ナース服体験コーナー」と人形モデルを用いた「心肺蘇生法(AED)体験コーナー」を設置しました。

各コーナーでは、子どもたちとたくさん触れ合うことができ、参加した学生、教職員ともに非常に楽しい時間を過ごせたとともに学生にとっては多くの学びがあったようです。

今後もこのようなイベントに参加していくことで、1人でも多くの方々に赤十字の活動を知っていただき、看護師という職種に興味・関心を持った仲間が増えることを願っています。

### 参加した学生の感想

心肺蘇生を教えてみて、多くの人が心肺蘇生のやり方について知りたいと思っていることがわかり、積極的に教えてほしいと言ってくれたことが嬉しかったです。また、自分自身が実際に教えたことで自分の知識を深めることができ、子どもには忘れないように実践を重視したり、保護者に対しては注意する点を伝えたりなど、年齢に合わせて適切に教えることができました。私自身も、人が倒れていた際には冷静に行動できるよう、忘れないようにしておかなければならないと思いました。

1年生 浅野 千夏

今回のボランティアでは、子どもたちへの救護服やナース服の着脱のお手伝いやAEDの使い方の説明を行いました。特に救護服やナース服の着脱のお手伝いの際は、小さな子ども相手に腕を袖に通すことや素早くボタンの取り外しを行うことがとても難しかったです。その反面、子どもたちとたくさん触れ合うことが出来るととても楽しかったです。今回のボランティアの体験を機に様々なボランティア活動に参加していきたいです。

1年生 宇戸 萌々子

参加前は、自分が心肺蘇生やAEDのやり方を教えて大丈夫なのか不安でした。しかし、積極的に来てくれた保護者の方や興味を持って聞いてくれる子どもたちを見て、やりがいを感じました。子どもたちに簡単な言葉でわかりやすく教えることは、難しかったです。この経験を通して、心肺蘇生やAEDの重要性に改めて気づくことができ、もっと大人から子どもまで多くの人に知ってほしいと思いました。私は、小児に興味があるのでこの経験を活かしたいです。

1年生 太田 瑞貴

ボランティアに参加して、多くの子供、ご家族と触れ合うことができ、とても貴重な経験ができました。また、恥ずかしがりながらも、笑顔で、写真を撮ってもらっている子供、それを見て、笑顔を見せるご家族の姿を見て、とても微笑ましく感じました。このボランティア活動を通して、子供の視線に合わせて、わかりやすい言葉を使ったりして、子供の立場に立って、物事を考える力を身につけることができ、とてもいい経験になりました。

1年生 武藤 早紀



## 本学学生が「全国大学ビブリオバトル九州Aブロック地区決戦」に出場しました

11月23日(土・祝)に九州女子大学(北九州市八幡西区)で行われた「全国大学ビブリオバトル九州Aブロック地区決戦」に、本学1年生の博多屋 桃香さんと峯 まはるさんが出場しました。

この大会は、大学生がお勧めの1冊を紹介し、どの本が一番読みたくなったかを聴衆の多数決によって決定するもので、今回が10回目の開催です。当日は、北部九州地方から5大学11名の学生が集い、それぞれ工夫しながらお勧めの本を紹介しました。博多屋さんは上橋奈緒子著『狐笛のかなた』を、峯さんは氷室冴子著『海がきこえる』を紹介しました。

本学の2名の学生は、緊張しながらも、自分の言葉でしっかりと本への思いを語ってくれました。峯さんは惜しくも準決勝敗退、博多屋さんは決勝まで進みましたが、首都決戦への出場はなりませんでした。終了後は、「緊張したが、とても楽しかった」と感想を語ってくれました。

以下、参加者の感想を紹介します。

好奇心で参加したので、初めは楽しければそれで良いという気持ちでしたが、地区予選に勝ち進み他の大学の方々のハイレベルなプレゼンを見るうちに、私も人を惹きつけるプレゼンがしたい!と感じるようになりました。私自身、他の方のプレゼンで読みたい本が沢山増えた上に、プレゼンを聞いている時は本当にワクワクして楽しかったです。今回紹介させていただいた『狐笛のかなた』という本は昔から大好きな本なので、この本で勝ち進むことができ本当に嬉しいです。素敵な大会に参加できて良かったです!

(博多屋 桃香)



私は基本的に人前で話すことが好きなのでとても楽しく参加させていただきました。短い時間でしたが、観客の方が私の話を聞いてくださったことが何よりうれしかったです。また、私自身が自分の紹介する本を読みなおしたり、ほかの発表者の方の話を聞いたことで読書の面白さを再発見できました。また機会があれば参加させていただきたいです。

(峯 まはる)



## 全国大学ビブリオバトル2019~首都決戦~ に本学学生が出場しました

12月22日、大学生による知的書評合戦「全国大学ビブリオバトル2019~首都決戦~」が東京の大手町で開催され、1年生の博多屋桃香さんが九州Aブロックの特別枠として出場しました。

本学学生は、今回で5回目の出場です。

今回は全国大学ビブリオバトル第10回の記念すべき大会で、全国各地で延べ293回もの予選会・地区決戦(参加学生1,526名)が開催されました。当日は、地区決戦を勝ち抜いた36名の参加者が6組に分かれて準決勝を行い、その勝者6名による決勝戦が行われました。

博多屋さんが紹介した本は、上橋菜穂子著『狐笛のかなた』です。博多屋さんは、準決勝での発表順が1番と緊張する中、切ない恋の話や文化人類学者である著者独特の繊細な描写など、この本に対する熱い思いを語ってくれました。

投票の結果、決勝出場とはなりませんでしたが、多数の聴衆の前での発表は、本人にも良い経験となったようです。

本学では、今後も、学内で小規模のビブリオバトルを開催していく予定です。「人を通して本を知る。本を通して人を知る」がキャッチコピーのこのゲーム。学生の皆さんにお気に入りの本を持ってぜひ参加してほしいです。



# 令和元年度卒業式

3月6日(金) 10:00～



令和元年度は、学部生98名、修士課程9名、博士課程1名の学生が卒業・修了しました。

※新型コロナウイルス感染症の影響により、式典は規模縮小・時間短縮して執り行い、式典中はマスク着用するなどの対策を講じております。



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになって一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。

「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：吉田 歩さん（平成26年度 看護学部卒業生）／福岡県・柏陵高校出身

 **日本赤十字九州国際看護大学**  
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行：日本赤十字九州国際看護大学 企画情報室

〒811-4157 福岡県宗像市アステイ1丁目1番地  
Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

<https://www.jrckicn.ac.jp/>

## 寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。